

## 渋谷利雄著

### 『祭り和社会変動——スリランカの儀礼劇と民族紛争』

小磯 学

スリランカでは、今日に至るまでシンハラとタミル両民族間の抗争が絶えない。本書は、著者自らが直接体験することとなったこの民族紛争と、人々の間に伝わるソカリと呼ばれる儀礼劇との関連について考察を試みたものである。用いられる資料は、一九八〇～八二年の著者のコロンボ大学留学中に行われた実地調査に基づいており、それらを一九八三年度立教大学大学院文学研究科に博士予備論文としてまとめ、提出したものを草稿としている。後述するように、この一九八一年に高まりを見せた民族紛争に著者自身が参与し、経験したことが、本書を著わす大きな動機となっているといえるであろう。

本書は、以下の諸章から構成されている。

- 1 序
  - 2 背景
  - 3 シンハラ社会と異人
  - 4 ソカリとシンハラ、タミル抗争
- むすび——象徴行為と社会変動

まず、その概略を紹介する。

著者の観点は、短いながら序章に集約して述べられている。その最も重要な点が、歴史学と人類学の交流を深めるということである。人類学が主な研究対象としてきた非西欧世界は、今日西欧文明化が著しく、激しい社会・経済的变化が展開している。調査者自身が革命、反乱、暴動などに遭遇することも稀ではなく、調査者・被調査者がともに激動の文化・社会状況に在ることを認識せねばならない。すなわち、異文化社会の動態的な把握が必要となる。その具体的方法として、このような社会変動と、その時代の精神を反映していると考えられる祭りとの関連性を著者は考察するのである。

祭りや儀礼とは、定式化された反復的象徴行為に相違ないが、同時にまた一回的で不可逆的な時間の一局面でもある。そしてそれは、社会安定期には社会活性化と秩序存続のちからとして、また社会変動期には社会変革のちからと

して、多様に作用しうる。このようなV・W・ターナーなどの見地をふまえて、著者は人類学の立場から社会の変化に取り組んでいく。

第一章は、フィールドの村のあるスリランカ中部山岳地帯の歴史的背景と、その土地の絶対多数を占める高地シンハラ人社会についての概観である。西欧の植民地支配はこの地に多大な影響をおよぼしており、キリスト教徒やインドから労働力として導入されたタミル人などが複雑な民族構成を生み出した。また早くから西欧化した低地沿岸部と地理的条件も加わって長く抵抗を続けた高地との間では、明確なアイデンティティの相違も見られる。

本書の中心をなすのがソカリ儀礼であるが、第一章後半から第二章前半にかけては、この儀礼のシンハラ社会における位置づけとともに、著者の調査事例についての詳細な記述がなされている。ソカリとは、シンハラ暦で第四番目にあたるエサラ月（七～九月）に行われるパッティニ女神に捧げる一連の儀礼のひとつで、踊りと芝居からなる年中行事でもある。この女神は、日照りや伝染病などの危機に際して兜率天から下生し人々を救うとされ、ソカリはその物語の再現でもある。乾季の暑さがもたらすけがれと病気の農作物の不作などの自然の周期による危機に際し、これらの原因である悪霊払い、また雨をよんで豊穡を祈願するの

がテーマとなっている。

一方、劇としてのソカリには、奇妙な服装や身振り、せりふなどパロディの手法により会衆（観衆）を笑わせる仕掛けが散りばめられており、人々にとってこの行事は一大娯楽でもある。著者は、この笑いが逆にパッティニ女神の厳格なイメージを浮き彫りにさせているとする。

第二章後半では、ソカリの劇の構成を分析することによって、著者はその悪魔払い・豊穡祈願としての性格を改めて浮き彫りにする。また、ソカリの笑いの技法と機能、その意味についても考察している。

ソカリの登場人物は、ほとんどが他の地方からの来訪者、つまり異人である。汚さや醜さが強調され、シンハラ社会の慣習を知らず、道化として会衆（共同体）から嘲笑（追放）される。共同体のけがれを一身にひき受けるスケープ・ゴートである。一方、「妊娠した女性を象徴する好色漢」の登場や、パッティニ女神がさまざまな試練・困難を克服し最後には出産をするという物語の構成は、豊穡性の実現あるいはその祈願に他ならない。また、著者は会衆に笑いをもたらす技法を、形・身振り・状況・言葉・性格などに分類し、そこに単に楽しみの笑いだけでなく、嘲笑・風刺・共感・世界観的笑いを見てとる。会衆がもたらす笑いは、結果として会衆自身によって共同体のけがれの放逐や豊穡

への願望が表現されることであり、神の存在が感知される。第三章では、著者は特に異人の問題とからめながら、村人の世界観の考察を試みる。ソカリの異人たちは、シンハラ的なものと非シンハラ的なもの、すなわち内と外の区別を明確化する。それらの異人（周辺）が女神（中心・カリスマ）のもとに統合され、秩序が創出されるという設定も、ソカリの重要な側面なのである。

最後に、著者は第四章として、シンハラ人とタミル人の敵対関係の根深さを歴史的に掘り起こすとともに、その対立が暴動という形で頂点に達した一九八一年にソカリにおよぼした影響を見る。ソカリには、世間のさまざまな新しいできごとが即興のかたちで投入される。それは、そのできごとを神話・歴史との関係で意味づける行為である。しかし、著者が見聞した一九八一年には、ソカリの会衆が「タミル人を殺せ！」と叫ぶまでに至り、たとえ一瞬とはいえ芝居あるいは儀礼は象徴行為のレヴェルを越えてしまった。それはあまりに現実的すぎ、悪霊払いの方法としての嘲笑・笑殺が敵としてのタミル人殲滅の課題に結びついた瞬間でもあった。本年中行事にすぎない儀礼劇が民族紛争と鋭敏にかかわっていたのである。しかしこのことはまた、現実社会のできごとを象徴行為のレヴェルに投入することによって、村人の評価がいまだ定まっていけない不安

なものを、知識の体系の中に位置づけ、対象化し、解釈を求めようとした行為とも受けとることができる。それは、社会変化に対する村人の機敏な対応、他者との多様で柔軟な関係を保とうとする行為の現われでもある。

むしろは文字通り全体のまとめではあるが、過去に起きた暴動の時期に偏りが見られる点を簡単ながら提示している。暴動はそのほとんどが四月（正月）から八月にかけて、すなわち巡礼や焼畑の点火を含め、新しい時間のもとで新たな秩序と世界が創られる祭りの時期に起こっている。一見秩序の維持・再確認の機能をもつ儀礼劇ソカリは、社会変動との相互関係のなかで演じられているのである。

以上が本書の概要である。本書の最大の特徴は、ソカリという儀礼劇を特定のコンテクスト（一九八一年におけるフィールドの村）でおさえ、そこに見られるシンボリズムを具体的な社会変化と関連づけた点であろう。「著者紹介」に、専攻が文化人類学と並んで南アジア現代史と記されていることから、著者があくまでもフィールドを動態的な変化の過程にある場ととらえている姿勢が窺える。しかし、改めて本書の題名である「祭りと社会変動」に立ち戻ってみると、果たしてその両者の関係（のメカニズム）が明白なものとなったかどうか、やや疑問が残る。確かに象徴儀礼としてのソカリそのものの構成については、シン



ポリズムを含め詳細で鋭い分析がなされている。ところが序章で力説されてもいる社会変動との関わりとなると、演じられるソカリのどの部分がそれに当たるのか、具体性に乏しいように思われる。強いて触れるならば、芝居の即興性の中に極めて今日的な話題が取り上げられ、しかもそれが「タミル人を殺せ！」という極端な象徴行為のレヴェルを越えた形で表出してしまった点のみにつぎるのはなからうか。しかしながらこれらは、全体の結論とまとめとなる部分で初めて記され、本書の中心となるソカリの分析からは漏れてしまっている。

また著者は、本書ではソカリのコンテクストを限定して考察しているが、さらにフィールドとした村の、スリランカ全体における位置づけにも分析の視点を広げることが必要ではなからうか。著者も冒頭でシンハラ人のアイデンティティが高地と低地に分かれることを指摘しているが、それがコロンボから遠く、さらに高地においても「周縁」と思われるフィールドの村にも一般化できるとは限らない。

一方、著者は異人という視点からも興味深い考察を加えているが、村人自身が抱いている異人観の扱いに注意を要する。著者も述べているように、村人のいうタミル人とは村の外の人全般を指すといつてよい。日本人である著者自身も、タミル人と結託していると受け止められ、あるいは

殺し屋呼ばわりされたのである。それでは、「社会変動」あるいは本書の副題にもある「民族紛争」とはいったい何であるのか、その実体にせまらねばなるまい。それは、シンハラ人 vs タミル人という単純な図式では理解できない側面をもっているのである。この点についても時空のコンテクストを定めた上で考察しうるであろう。また同様な視点から（極めて資料に乏しいと思われるが）、一九八一年以前のソカリと民族紛争の関連性を歴史的に再構成していくことができるならば、村人のもつ「タミル人」のイメージの変遷を浮き彫りにし、逆に村人（シンハラ人）のアイデンティティの移り変わりといった問題点を考えることも可能となる。

さらにもう一点つけ加えるならば、社会変動と祭り（儀礼）の関係を探るに当たって、ソカリが選ばれた必然性が薄いように思われることである。社会の変動はあらかじめ進行しており、ソカリはあくまでもそれを表出させるきっかけに過ぎない。新しいできごとを取り入れていく即興性も、特にソカリに限られたことではないと思われるし、タミル人とダブらせて受け取められる異人も他の儀礼や芝居に登場するのではなからうか。

いくつかの問題点を挙げたが、象徴行為を社会的コンテクストの中で解釈する著者の視点には、多くの学ぶべきも

のがあるのも事実である。特にスリランカのように、民族紛争といういわば極端な変動過程にある社会では、祭りという日常生活から離れた「境界状態」の中に現実社会のできごとが反映されやすい。これは象徴行為としての祭りが、本来現実社会を対象化し、解釈する機能を持っているからに他ならない。祭りのこのような仕掛けゆえに、そこには象徴行為のレヴェルを越えてしまいう間隙が絶えず潜んでいるのである。「タミル人を殺せ！」という叫びとなって表出した、一瞬とはいえ一触即発の危機的状況は、あるいは暴動となって社会変革への行動の契機を作り出していたかもしれない。実際にこの叫びを耳にした瞬間に、著者が感じた恐怖はどれほどのものであったことであらう。本書でなされている分析もこの時の緊張感に端を発していると思

われるが、フィールドに身を置くことの重要性を痛感させられる。象徴行為と現実社会は常に表裏一体の関係にあることを、抽象論ではなく文化人類学の立場から、揺れ動くスリランカ社会を具体例として提示したことは高く評価される。本書は、南アジアの研究者だけでなく、人類学や広く歴史学を学ぶ者にひとつの指針を与える刺激的な書となる。

（A5版変、本文二六六頁、定価二四〇〇円、同文館、一九八八年）

※渋谷利雄氏は、一九八五年立教大学地理学専攻博士課程後期課程満期退学、和光大学人文学部助教授

※小磯学氏は、立教大学地理学専攻博士課程、後期課程在学